

ず、ために管理職能の理解に乏しいことからである。それゆえ、これを改善するには、まず経営上層部から管理能力の開発を始めて、順次下層におよぼすこと、そしてフィールドセールスマネジャーの段階においては、管理職能と執行（作業）職能との相違が実際に理解できるために、日々果すべき責任をめぐって具体的に能力開発計画が作成されなければならない。

河 辺 実： 否 定 表 現

Minoru Kawabe: Der Ausdruck für Verneinung

In Anlehnung an die Forschung von Ikoma, Jespersen, Behaghel, Blatz werden die Entstehung, die Geschichte des Wechsels und Variationen der Negation im Deutschen betrachtet und wird der Grund der Kompliziertheit und Schwierigkeit des Verneinungsausdrucks im Deutschen ermittelt.

Manche Beispielsätze werden auch aus den Werken von Ikoma, Behaghel, Blatz und einigen grammatischen Wörterbüchern angeführt. Der Schreiber erlaube sich, diesen Forschern den herzlichsten Dank auszudrücken.

ドイツ語の特長として、この言語が女性的、情緒的であり、従っていきおいときとして論理性において欠くるところのあることは、O. Jespersen を始め、一般に指摘されるところであるが、それがドイツ語の否定表現の混乱・意味の不明確を惹き起す原因の一つともなっていると思われる。

例えば

Er kann nicht kommen

なる文の意味は

1. Es ist ihm unmöglich zu kommen.
2. Es ist möglich, daß er nicht kommt.

の二様に解することができる。

また Man sieht, daß er an nichts keinen Anteil nimmt.

なる文において、否定の重複は、単に否定の意を強調するのみであって、決して否定の相殺による肯定を意味するものではない。

しかも、言語における否定の役割の重要なことは今更言を俟たないところである。著者は生駒佳年教授の“否定の研究”に示唆され、Jespersen, Behaghel その他の研究を参考に、ドイツ語における否定表現が如何に形成され、如何に使用され、また如何に変遷してきたかの概略を考察してみたいと思う。研究・調査の不徹底から誤謬や遺漏も多々あると思うが、更に他日に完成を期したい所存である。

ドイツ語における本来の否定詞は *nē. nē. nei* であった。（ゴート語に用いられた *nih* は、本来 Konjunktion にすぎなかったものが、後に *ni* の意味に変わったものである）これらは何れも文の要素として極めて重要であるにも拘わらず、形の上では極めて微弱な小語または綴りで Akzent も弱いもので、かつ原初段階では文のできるだけ初めの位置におかれる傾向があり、多くは定動詞の前に位置した。このことは古代日本語における“なこそ”、“なゆきそ”などの如き語法における否定詞“な”と考え合わされて興味深い。

ahd. Siecher ne was unter in.

mhd. では否定詞 ne が, enklitisch に n, ne として, また, proklitisch に en, in などとして, 特に助動詞とともに, 用いられた:

ich enweiz. ich enkan.

sine ruohte, wie im waere.

ich enweiz, ob ër daz taete.

また, nichtverbale Enklitika で: ne-weder, noh (got. nih).

英語でも同様に古い nē が “sein”, “haben”, “wollen” などと融合した形が用いられた。Shakespeare の中にも will の Negation として nill が用いられているし, また “willy-nilly” (“mag wollen oder nicht”) の形にも跡を留めている。

上述のことは, フランス語の je ne peux, je ne sais および n'importe, naguère (=n'a gaire, deutsch “es ist nicht lange”) などとも対応している。

このように否定詞が本来の完全な形を失なって他の語と融合したケースはスラヴ諸語にも見られるが, 今日のドイツ語では nicht, nie, nein およびこれらに類する否定表現の中にある n がそれであって, 本来の nē そのものはドイツ語のみならず, ギリシア, ラテンその他の諸語においても逐次退化し, 独立した否定詞としてはのこっていない。また nur は ahd. niwâri “es wære denn” から由来する語で, 否定の先行した形のもので, 時代とともに, 恰かも eg. の but (これは本来 außer の意) と同様, 否定の部分が余分と考えられ, 終に省略されるに至ったものである。

ところが, 他方においては, 否定の意味をできるだけ強調明確化することが行われるようになっていった。即ち, 否定語に他の何か無価値な微小なものを表わす名詞類を付加することによって否定の意味を強調するのである:

Sô iltun sie heim sâr, drof ni dwalêtun thâr.

(=So eilten sie heim alsbald, nicht eine Tropfen [durchaus nicht] säumten sie dort).

Siu sô heim quâmun, ës wiht ni firnâmun, waz ër mit thiu meinti.

(=Als sie heim kamen, vernahmen [verstanden] sie es durchaus nicht, was es damit meinte).

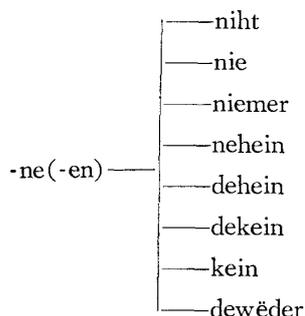
かかる否定強調のために付加された元来それ自身否定の意味をもたない wiht (現在, Gewicht, wichtig, Wichtelmännlein 等に残っている) および io, iowiht, ioman, iomêr 等に更に否定詞が付加され, いわゆる二重否定の形が行われる様になった。例えば, wiht の否定形として niwiht, neowiht → niht; ioman → nieman; iomêr → niemêr などである。従って, nhd. における nicht は, eg. の not がそうであるように, 本来は eg. の nothing の意味であったものが, 後に単独で否定の役割を担うに至ったのであり, その結果 nothing の意味を表わすためには nicht に更に -s を付した形が用いられることになった。然して, nicht の古い用法は現在でも mit nichten, zu nichte machen, vernichten, zernichten などの表現に尚若干の痕跡を留めている。その他例えば,

Luther, tut er uns doch nicht, das

macht, er ist gericht't

なお nein もまた “nicht eines” の意味で, nicht などと本来同根のものである。

mhd. に至りいわゆる文章否定詞 *-ne*, *-en* 等は上述の如きいわゆる概念否定を伴わず単独で用いられることは殆どなくなり、



の如き組合わせとして用いられるようになり、ときにはこれらに加えて更に不必要とさえ思われる *niht* が添えられるというような念のいった語法までも見られるようになった:

Ichn gelachte niemer niht.

Er'n kunde'z niht verenden.

Nieman neschuldige mih.

Noch enist mir niht gelungen.

ところが、12世紀中葉以降 *-ne*, *-en* が次第に退化し、終には全く姿を消すに至り、今度はこれに代わって、従来単なる否定のための強調語にすぎなかった *niht dehein*, *kein* 等々が独立し、完全な否定詞として用いられるようになってきた。例えば、“*nichts*”の意味を表わすべき *nicht* が如何にして今日の如き機能を有するに至ったかについては、Jacob Wackernagel によれば、主体または客体概念の如何なる部分もその文章内容に関与していないことを表現することによって文章内容そのものをも同時に否定することになるという見方も可能であり、今日なお *hier ist meines Bleibens nicht*. の語法にみられるような *nicht c. gen.* をもつ文章がそれである。

nie, *nimmer* (ober, Mundarten), または、eg. の *never* などが今日の如く独立した否定詞となるについても同様な見方が可能である。また、Jespersen も指摘する如く、ドイツ語において否定詞 *nicht* が文の最後に位置するのは、*-ne*, *-en* が消失した後にも依然として元のまま動詞の後の位置に留まったためである。

Frouwe, ir sult niht weinen durch dēn willen mīn.

In ir hērze kunde ich niht gesēhen.

Ir heimnot was hie niht.

Das Leben ist der Güter höchstes nicht.

nhd. で *Verbot* の場合、稀に強調の目的で *nicht* が動詞の前におかれることがあるが、この際強い *Betonung* を伴う:

nicht hinauslehnen!

その他 nhd. における強調否定の若干の引例:

Das ist keine Bohne (keinen Pfefferling, keine taube Nuß, keinen Schuß Pulver, keine Pfeife Tabak) wert.

Das ist gar nicht wahr.

Ich kann ihm überhaupt nicht glauben.

Die Bemerkung ist nichts weniger neu, daß keine.

Kriege so unmenschlich geführt werden als die, welche Parteihaß im Innern eines Staates entzündet.

Der Bauer ist nichts weniger als ein Naturmensch.

Nach Sicilien ist's nichts weniger als gefährlich.

Er kümmert sich nicht im geringsten um mich.

Er verdient nicht das geringste.

その他, 更に他の副詞と重複し, 若しくは更にまた融合して強調を表わすことがある.

nun und nie, nie und nimmer mehr, nun und nimmermehr, niemals (nicht jemals), nie (nicht je),
nimmer (nicht immer),

nichts(nicht etwas), niemand(nicht jemand), nirgendwo(nicht irgendwo), nirgend (nicht irgend) usw.

次に, 否定の仕方について考えると, 否定が動詞に作用するもの:

die Post ist heute nicht gekommen.

と, 否定が文の動詞と非動詞要素とに作用するもの:

niemand kann zweien Herren dienen.

更に, 文の非動詞要素にのみ作用するもの:

nicht alle sind frei, die ihrer Ketten spotten.

など三つの様式が考えられるが, Blatz は前者を Satznegation (文章否定), 後二者を Begriffsnegation (概念否定) と名付けている. もっとも, これについては, Gebauer らは前者を qualitative Negation, 後者を quantitative Negation と称しているし, 他方, Delbrück らの如く, これらの区別を歴史的にみて余り意味のないものとしている者もある. O. Behaghel はその "Deutsche Synthax" IIIにおいて次の如き諸例をあげている:

Gott verläßt die Seinen nicht: Gott verläßt die Seinen niemals;

diesen Winter wird nicht gespielt: diesen Winter findet keine Vorstellungen statt;

das ist nicht zu essen: das kann niemand essen;

es ist keine 10 Uhr;

sie war noch keine 16 Jahre alt (Weise, Altenburger Mundart 20);

vor keiner Viertelstunde hab' ich diesem Mann für einen Rubel abgekauft;

so kein Gesicht sah ich in meinen Leben.

動詞を否定する場合, 最も古くは単に ni が用いられた:

der ni willi, der ni weiz.

しかし, やがてniと非動詞要素の融合したものや, あるいは, 非動詞要素がniの代りに, または ni と共に用いられるようになった. その中最も古いものは nalles (=ni alles) で, これは Behaghel の指摘する如く古代英語にも用いられているところから, 恐らく西ゲルマン語からのものと思われる:

Beow. 2146 nalles ic þam leanum forloren hæfde.

hd. では既に Benediktinerr にも現われている:

nalles sih kebant keile.

後には, これらの代りに副詞的 Akk. neowiht が用いられるようになり, これが mhd. niht, nhd. nicht と変

っていく。また初期の nhd. では nichts の形もみられる:

als gehorten sie nichts zur kirchen.

mhd. では、動詞を否定する際、それ以前の時代における如く否定詞 en- を単独で用いることはむしろ少なく、一般には en- と niht との組合わせの形が用いられるようになった:

noch enist mir niht gelungen.

daz in niht enschadete diu ünde noch diu fluot.

かくの如く、en- と niht の組合わせで否定を表わしている中に、形の微弱な本来の否定詞 en- の方が次第に消滅していき、副詞の作らきをしている niht が残ることになっていった。そのため、今日のドイツ語において動詞を否定する否定語は動詞の後に位置し、概念否定の否定詞が否定されるべき語に先行するのと逆の関係になっている。即ち、Heyse のいわゆる“重要な、内容的な、より強音の規定詞は、一般的な、著明ならざる、弱音のものに順次後続する”という数個の並列の規定詞の規則に則り、あらゆる副詞、補足語等の後、客語、過去分詞及び不定法にのみ先行する位置にくることになる。従って現在の nicht の位置は、フランス語における否定語 ne~pas (point) の pas (point) のそれに相当する。

Ich sah meinen Freund nicht.

Ich habe meinen Freund lange nicht gesehen,

weil er von einer Reise in die Schweiz

noch nicht zurückgekehrt ist.

Mein Leben ist für Gold nicht feil.

Er kann nicht schreiben.

なお、本来の否定詞 en- が固定化して現在に至るまで痕跡を遺しているのが既述の nur である。

Behaghel によれば、しかし主文においてこのように en が消滅してきたことと、除外文におけるそれとは関係ない。即ち、種々の文献を参考すると、一般に en が殆ど姿を消しているのに対し、除外文ではなお en が用いられた。nhd. では en を含まない除外文として es sei denn, er käme denn などがなお遺ってはいるが、それ以外では wenn nicht, wo nicht などに代っている。また動詞 unterlassen 等の内容を示す副文は、多くが不定句または肯定の daβ- 文章になっている: nicht unterlassen, etwas zu tun; leugnen, zweifeln, daβ……

haben を助動詞とする完了形の否定形には、ni, niht のほか、Part. un- を用いることもある。un- は nē の Ablautform である:

du hast min unvergezzen;

es ist von mir dein gebot unczerprochen.

これは受動における用法から由来するといわれるが、niht, un 何れによる否定形も同じ意味を表わすものであった (Behaghel):

daz ist mir niht benommen.

daz ist mir unbenommen.

非動詞要素の否定、即ち**概念否定**にも nicht が用いられる。

nicht が nē に代って文章否定に用いられるようになってから、概念否定は ahd. では nalles によって表現されていたが、mhd. に至りそれが消滅して暫らくの間は概念否定は不可能となっていた。現在概念否定と文章否

定との区別は、nicht の位置によって行われるが、これは Heyse の云うように絶対的かつ明快な基準を与えるものでないため、ドイツ語における否定文の意味の不明確・曖昧さを惹き起すことにもなっている。概念否定の場合、nicht は否定さるべき語の直前にくるといっても、個々の場合において nicht が先行する動詞を否定するものか、後続する概念を否定しているのか遽かに判断のつきかねる場合が往々見られるのである。例えば、

Gott ist nicht endlich.

Er kann nicht kommen.

第一の文において Gott と endlich との結合が否定されるとすれば、Satznegation になるが、nicht が endlich という概念のみを否定すれば概念否定となり、Gott ist unendlich なる文と同意になる、第二の文については、

Es ist ihm unmöglich zu kommen.

Es ist möglich, daß er nicht kommen.

の二様の解釈が成り立つことになる。

この他、概念否定の手段として、形容詞・副詞については、un, in, a, ohn 等の前綴, los その他の後綴, 名詞概念については否定冠詞 kein が用いられ、さらに代名詞・代名詞的副詞には夫々対応する否定形を用いることができる:

einer: keiner

jemad: niemand

je: nie

einmal: keinmal, niemals

immer: nimmer

etwas: nichts

irgendwo: nirgendwo usw.

概念否定の場合、文章の一部要素を否定するにすぎず、文章全体としては肯定であることは注意を要する。

古来、ドイツ語では否定の意味を強めるため同一文章中に2個またはそれ以上の否定詞を反覆重複するいわゆる冗語的**二重否定**が盛んに行われ、その用例は殆ど無数に見られる:

als wär' nicht kein Zank gewest.

Wir sind niemand nichts schuldning.

Ich habe ihr keinem nie kein Leid getan.

Man sieht, daßer an nichts keinen Anteil nimmt.

Alles ist Partei und nirgends kein Richter.

二重否定の要素としては種々の組合わせがある。

nicht—nicht, nichts—nicht (nichtesnicht もこれに類する), kein—nicht (kein—un-), niemand—nicht (kein, nichts).

その他 selten などみられる。

daz man nie also richen so senftes willen

selten vant; neme ouch kein ihr thohter

kein man.

Bie Gott ist kein Ding unmöglich.

これら冗語的二重否定は Schriftsprache では 18 世紀以降、殆んど廢滅してきているが、Mundarten では現在なお生きつづけていることは、この変化が自然発生的といえるよりは、むしろラテン語文法の影響によることを如実に示している。Jespersen の引用によれば、ある男が衆人に向って Hat keener Schwamm? と尋ねたが応答がないので、更に重ねて、Hat denn keener keenen Schwamm nicht? と問うて初めて応答を得たという。また生駒教授の指摘する如く、Ludwing の Erbförster の Weiler の言葉の中にこの種の表現がしばしば見られる。例えば、

Wer da vom Schloß daher gepfiffen kommt und
an des Försters Fenster pocht, als wär' nie
nicht passiert——das ist der Stein.

Goethe もその書翰中にかかる語法を時に用いている。しかし、Gottshed の次の言葉は示唆に富んでいる：

“Die doppelte Verneinung, die noch im vorigen Jahrhundert bei guten Schriftstellern gewöhnlich wahr, muß itzo in der guten Schreibart ganz abgeschafft werden. Allein heut zu Tage spricht nur noch der Pöbel so.”

かくして、Goethe の場合、“König von Thule” の最後の Vers は元は “trank nie keinen Tropfen mehr” であったものを、後に Goethe 自身、keinen を einen と改めている (Behaghel)。かかる重複否定はしかし、他の、特に Klassiker たちの時代までは極めて一般のことであった：

ich denke dabei: daß auch die Franzosen noch kein Theater haben——kein tragisches gewiß nicht!

現代ドイツ語では、少なくとも文語では、冗語的二重否定はなるべく避けるようにしている。しかし例えば、sich nicht entblöden は、実際には sich entblöden と同じ意味であるが、形の上で肯定である sich entblöden が sicht scheuen と同じ意味であることからの混同から、さらに nicht が加わったものである。

Konjunktion の noch もまた重複否定に関連して考えられる。noch は古くは直後に続く非動詞の概念を否定するものであった：

ob ich mich schon für Gott nicht fürchte, no für keinem Menschen schewe.

Sie aß noch trank nichts.

しかし、これらの用法も他の重複否定と同様、漸次廢れていった。また否定が比較語の代りに用いられることもある：

Weisheit ist besser weder Gold.

(eg.) I am greater nor he.

これらの weder, nor は何れも “und nicht” の意味である。

同一文中に否定詞が重複して現われる場合、ドイツ語では本来否定の強調を表現したことは上述の如くであるが、論理的には否定が二回繰返されれば逆に肯定を表現することになる筈である (肯定の二重否定)。この不合理はドイツ語が本来論理的と云うよりは、むしろ情緒的言語であることを示す一例であると云えよう。近世に至りラテン語の影響を強く受けるに従ってドイツ語の二重否定も肯定を表現すると考えられるようになり、しかも、その場合にもラテン語では、肯定を強調する意に対し、ドイツ語では Litotes 即ち、緩和された肯定表現と解されたことは注意せられねばならない。

lat. non sine Laude = mit großem Lobe

nhd. nicht ohne Lob

しかして、この否定から肯定への意味の変化も極めて最近のことであり、前述の如く18世紀以前では稀な事象である。しかし、主文の否定が副文の否定と結合して肯定を表わすことは比較的早く、既に15世紀頃から現われるようであるが、これも明らかにラテン語の影響に基づくものである。若干の例を引用すると：

Kein Unfug ist unverübt gelassen.

Nicht unbedachtsam zog ich aus.

Kein Zug in der Erzählung war nicht erlebt.

Du gehst nicht ohne mich, Vater, du kannst nicht ohne mich leben.

Kein Mensch war, der nicht Rache prophezeite.

次に, verhindern, unterlassen, leugnen usw. の動詞の内容を示す副文において、動詞が否定の場合と肯定の場合との2つの形が混在しているが、副文を否定表現にすることは、例えば, verbieten と gebieten の二つの異った動詞による2つのそれぞれの表現法における肯定と否定との混同から由来している。即ち, verbieten の内容は肯定文で示し, gebieten のそれは否定の形で示すべきものが, verbieten の場合に gebieten との混同が生じたのである。その他では、例えば否定の気持が、論理を忘れさせて否定語を前面に押し出した結果でもある：

ich behüte wol daz, daz ich im Kome so nahen.

ich hete wol behüetet daz, daz ich nicht.

vermeldet hete sinen lip.

Die sorge lag mir im Kople, daß mir die

Spitzbuben nicht über mein Kapital geraten möchten.

Sorgt nicht, daß ich meinen guten Rappen je keinem andern anvertraue.

肯定の比較級, 最上級を補足する副文にも否定が用いられる：

der wird dir besser sein denn kein Gold.

den 19. und 20. ist die größte Schlacht geliefert, die nie auf der Erde stattgefunden hat.

er war so schön als kein Baum im Garten Gottes.

so stark als ich sie nie gefühlt.

stärker als ich sie je gefühlt.

so stark wie ich sie nie gefühlt.

更に, bevor, bis, ehe 等により導かれる文にも否定が入ることがある：

auch bin ich ehe denn kein tag war; dar wahre Virtuose glaubt es nicht, ehe er es nicht merkt.

また否定と考えられる疑問文に肯定が用いられることがある：

Kumet uns iemen mere withere wane thu eine ?

ouwe, sun min, sol ich dich immer gesehen, hast du dich da gefürchtet ?

hast du dich da nicht gefürchtet ?

nhd. で疑問詞に導かれる疑問文が否定・肯定の両表現をもっている。

Was du sagst—Was du nicht sagst

ただし、この場合、厳密に云えばその意味は必ずしも同じではない。

Was du nicht sagst—es gibt nichts, was du nicht sagst.

となって、従ってどちらかと云えば、否定の形は関係文に多く用いられる。

Was wird er nicht tun?—

er wird beinahe alles tun; was nicht?

sagt man mir solche Dinge ins Gesicht, was wird nicht hinter meinem Rücken gesehen?

Wie mußte sich nicht Diogenes von diesom Volke mißhandeln lassen?

Was thäte ich nicht für dich?

最近の口語では疑問文につづく疑問文では否定なしに話されることがある：

Warum überlaß ich mich nicht dem gütigen,

Schicksal, und fahre in einem dieser Nachen in das Meer hinaus;

Sei nicht geizig und laß dir was abgehen.

Wären Sie mit'n vornehmer Herr und hätten

was Besseres vor sich jesehen;

逆に、後続文の否定が先行文に作用している例もみられる：

Seine Vorschläge, sein Rath, nichts ist aus der Luft gegriffen.

次に、ここで **Negation** の意味を考えてみることにする。Negation を単に否定と云うについては多少の抵抗を感じるものであるが、これには矛盾対立を表現するものと、明白に反対々立を表現するものがある。例えば：

Ist er glücklich?

なる Fragesatz に対する答えは2通り考えられる：

Er ist nicht glücklich.

Er ist unglücklich.

このうち前者は矛盾対立を、後者は反対々立を示している。即ち、nicht glücklich と云えば、glücklich 以外の凡ゆる程度を示すが、unglücklich と云えば、glücklich の正反対のみを示している。しかしこの反対表現のためには本来簡単な、相互に対応する表現が存在する。即ち、weiß—schwarz, wahr—falsch, arm—reich, lang—kurz, alt—jung, klein—groß, klug—dumm, schweigsam—geschwätzig, hoch—niedrig, dick—dünn, schön—häßlich, lieben—hassen, voll—leer, viel—wenig, warm—kalt, breit—schmal, behaupten—leugnen usw. その他 außer, ohne など前置詞を用いる表現も可能である。ahd. では unrot, unschwarz などの形さえみられる。更に、現在でも、un-, ohne- などの他、-los, -frei 等の接尾辞を用いて対立概念を表わすことは前にも一寸触れた通りである。また Goethe にも、

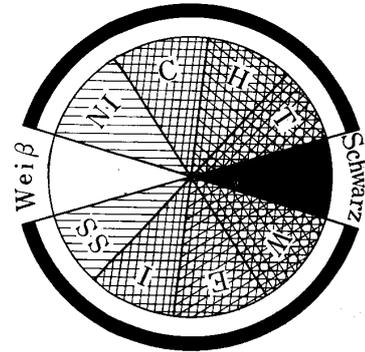
ich werde unermangeln

の用例があり、schweizerdeutsch には、

es had mi u-gefremt

などの用法がある。これら negativ を表わす接頭辞は、もちろんギリシャ、ラテン語にもあるが、外来語を Präfix によって negativ にかえる場合、本来はその原語の Präfix によったのであるが、近来、外来語にゲルマン語の Präfix を付することによって、原語のそれを付した場合とは異なった意味の negativ を表わすこと

がある。例えば, e. religious の反意語は unreligious と irreligious の2語があるが, 前者は nicht religiös, 後者は gottlos を表わす。他方, ギリシア語の Präfix を他の語に付することにより, 別の意味を表わすことも行われている。例えば, unmoralisch は moralisch の反対々立の概念を表わすが, a-moralisch は moral に関係のない, 善悪を超越した矛盾対立の表現である。これに類する例は, a-logisch, a-sexual, a-historisch, a-sozial, a-tektonisch 等々多数ある。ただし, anormal は abnom から派生した俗語 anomal と normal との混淆から生じたものであると云われる (Wackernagel)。その他, nicht, kein が名詞概念を否定する Präfix として用いられる: Unchrist, Unmensch, Keinchrist, Nichtchrist, Widerchrist。これはフランス語 non, 英語 non に対応するものである。



このようにある概念とその反対概念との間にその何れにも属さない中間概念としての矛盾対立の概念にも, なおいくつかの段階がある。これについて Dornseiff は, heiß—warm—lau—mild—mollig—frisch—kühl—kalt—frostig—eisig の例を挙げている。また R. Jahnke はこれらの矛盾および反対関係を上のように図示して説明する (R. Jahnke: Deutsch für Deutsche)。

図において weiß の矛盾対立は, weiß を除いて, schwarz を含むすべての色彩であり, 反対々立は schwarz である。従って, nicht weiß といえ, weiß 以外のあらゆる色彩である可能性が含まれ, 正確な色彩は, 別に更めて示される必要がある。

数的否定について, Jespersen は, “論理的否定の関係が A —nicht A であるに対して, 数学的否定においては例えば $+4$ — -4 の関係を示す” といっているが, 生駒教授は更に言語上の数的否定について種々の場合について深い考察を行っている。それによれば, 一般の言語表現において数の否定は本質的には他の一般言語要素の否定と異なるものではない。例えば, nicht gut が sehr gut でなく gut 以下の程度を示すと同様に, 単に nicht vier といえ, 一般には vier 以下を示す場合が多い:

Ich bin in diesen Sommerferien nicht zehn Tage im Gebirge gewesen.

Sein monatliches Einkommen erreicht nicht 500DM.

これらの文では, それぞれ 10 日以下, 500 マルク以下を示すとみるべきである。しかし, これらの場合でも nicht に強勢を付し, または補足的な文を付することにより矛盾対立を表わすこともできる:

Der Berg ist nicht 1,000m hoch, sondern 2,000m.

以上諸例における数は勿論通増的秩序の数であって, 時点などを示す数の否定は当然矛盾対立を表わすことになる:

Der Zug fährt nicht um 3Uhr nachmittags ab.

数に関連して, all を含む否定文が考えられねばならないが, その場合 nicht による否定を含む文の意味の不明確さが問題になる。これについては既に前に触れておいたが,

Alle diese Steine sind nicht unecht.

Nicht alle diese Steine sind unecht.

上掲二例文について, 前者は文章否定であり, 後者が概念否定であることは明らかであるが,

Alle Druckfehler können hier nicht aufgeklärt werden.

この文例では *alle* に強勢を付することにより概念否定を含む文になる可能性がでてくる。

否定文はまた、反対の否定により既述の如く、表現の緩和もしくは逆に強調という否定以外の意図が示されることがある：

er ist kein unmensch.

es ist nicht unmöglich.

es ist nicht übel.

また肯定を期待して反語的に用いられる修辭的疑問文もある：

nicht wahr?

wer hatte nicht schon gelesen?

その他、丁寧な要求、強い驚嘆などを表わすための否定文もある：

Möchten Sie mir nicht sagen, ob——?

Wollen Sie mir die Zeitung da nicht herreichen?

Wollen Sie nicht ein Glas Bier trinken? (!)

以上のほか、*nicht*, *kein* などの否定詞を用いずに、間接的に否定を表現したまたは不完全な否定を表現するものがある。以下それについて若干の考察を進めよう。

間接否定表現の方法には、疑問文を用いることにより、反語的に否定を表現する所謂修辭的疑問文がある。この場合、それが肯定の疑問文であれば、否定を表現し、否定の疑問文であれば肯定の意味を表現することになる。以下若干の例文を示す。

Wer weiß?

Wo soll ich hingehen?

Seid ihr Soldaten?

Wer wird sich deiner erbarmen?

Wer hat je eine ähnliche Torheit begangen?

Wofür bin ich ein reicher Mann, wenn ich leben

soll, wie ein Hund?

Wie konnte es anders sein?

また仮定の条件文を伴う主文章において、第二接続法を用いて間接的に否定を表現することがある。

Er wäre glücklich, wenn er gesund wäre.

Ich wäre Narr, wenn ich solchen Vorschlag annähme.

更に、第二接続法には副文との比較をもって否定を表現することができる。

Er ist größer, als daß ihm der Neid schaden könnte.

Ich war zu schüchtern, als daß ich den hochgestellten Herrn angesprochen hätte.

Lieber mögen die Mauern der Stadt mich unter ihren Trümmern begraben, als daß ich von meinem guten Rechte abwiche.

第二接続法による否定表現の例。

Wenn tch ein Vöglein wär' und auch zwei Flüglein hätt', flög' ich zu dir.

Wenn ich ihn gesehen hätte, so würde ich es ihm gesagt haben.

Beinahe hätte ich dich nicht erkannt.

Ich wäre bald gestorben.

Sie sollten ihm doch lieber schreiben.

また als ob を用いた文章による否定の表現:

Als ob er reich wäre!

Als ob du es nicht wüßtest!

Gott, der Teufel, der Henkel, der Kuckuck, der Geier.

などにより否定を表わす.

Gott weiß.

Weiß der Teufel, wer alles da war?

ときには, der Teufel, der Henker が否定詞として nicht と同様に用いられることがある.

Ich weiß den Teufel davon.

Ich frage den Teufel danach.

Ich werde den Teufel tun.

不完全な否定を表わすには, schwerlich, kaum, wenig などの副詞を用いる.

“schwerlich” は本来 schwer と同義であったものが, 後に “辛うじて” などの意となり, 現在の eg. hardly と同様に, “殆ど~しない” “多分~しない” の意味となった.

Ein Kaufmann kann sich schwerlich hüten vor Unrecht.

“kaum” は, “mit Mühe”, “schwer” の意味から, “beinahe nicht”, “noch nicht ganz” の二通りの意味をもつようになった.

Er wird es kaum tun.

Das ist kaum glaublich.

kaum, daß……の構文も同じである.

Ich glaube kaum, daß er morgen zu mir kommen wird.

“wenig” もまた不完全否定詞として用いられる.

Er hat wenig Geld.

Ich habe wenig Hoffnung.

Er ißt weniger Kuchen als Brot.

Das ist weniger richtig.

Von allen Menschen traue ich dir am wenigsten.

先行する否定文章と呼応して同様の否定を表わすには, ebenso wenig が用いられる:

Er kann mir keinen Glauben schenken, ebenso wenig ich ihm.

文 献

- 1) 生駒佳年: 「否定の研究」(1939).

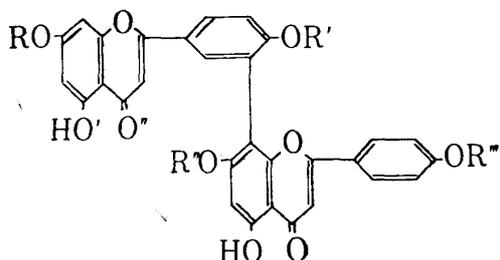
- 2) Jespersen: A Modern English G).
- 3) Behaghel: Deutsche Syntax II (1924).
- 4) Blatz: Neuhochdeutsche Grammatik (1900).
- 5) Curm: A Grammar of the German Language (1922).
- 6) Paul: Deutsche Grammatik IV (1920).
- 7) Paul-Schmitt: Mittelhochdeutsche Grammatik (1950).
- 8) Paul: Prinzipien der Sprachgeschichte (1937).

中沢浩一: 8,8''-biphenyl 型の新二重分子フラボン (“ギンゲチンの化学構造” 補遺)

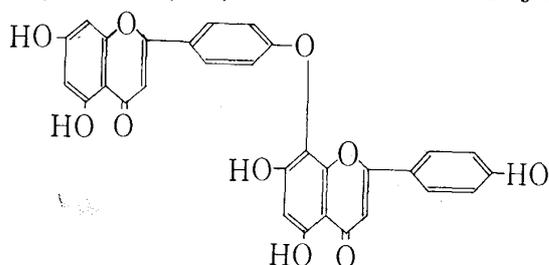
Koichi Nakazawa: A new Biflavone with 8,8''-Biphenyl Linkage
(Supplement to “The Structure of Ginkgetin”)

これは1962年の筆者の総説¹⁾への追加である。

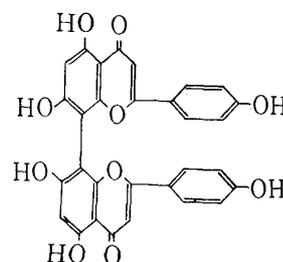
松柏科植物の葉に含まれる二重分子フラボンとして、両アピゲニン分子が3',8''-biphenyl型に縮合した Amentoflavone (I) およびその6種のメチルエーテル類 (II~VII), ならびに両分子が4',8''-biphenyl ether型に縮合した Hinokiflavone (VIII) が1963年までに発見された。しかしアピゲニンにおいてはその8-位の方が3'-位よりも反応性が大きいから、筆者は以前から8,8''-biphenyl型の対称構造をもった二重分子フラボン (IX) の存在も可能であろうと考えていた。



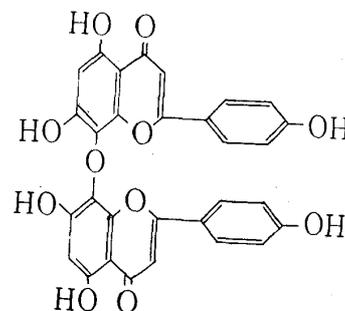
	R	R'	R''	R'''
I Amentoflavone (ウラジロイヌガヤ)	H	H	H	H
II Sotetsuflavone (ソテツ)	H	H	CH ₃	H
III Bilobetin (イチヨウ)	H	CH ₃	H	H
IV Ginkgetin (イチヨウ)	CH ₃	CH ₃	H	H
V Isoginkgetin (イチヨウ)	H	CH ₃	H	CH ₃
VI Sciadopitysin (コウヤマキ)	CH ₃	CH ₃	H	CH ₃
VII Kayaflavone (カヤ)	H	CH ₃	CH ₃	CH ₃



VIII Hinokiflavone (ヒノキ)



IX Cupressuflavone (オオイトスギ)



X

1) 中沢浩一: 本誌 12, 1~8 (1962).